

# 太田俊雄の宗教教育思想（一）

山 田 耕 太

## 1. はじめに

太田俊雄は1911年に岡山県御津郡伊島村（現、岡山市）に生まれ、1988年に群馬県安中市で亡くなったが、その77年の生涯を通して、人間の教育を説き、またそれを実践した。その歩みを簡潔に要約すれば、人間になる教育を受けた時代（1911 - 1935年）と、人間にする教育に生きた時代（1935 - 1988年）に分かれる。<sup>(1)</sup> その生涯における大きな転換点は、法政大学高等師範部英語科の学生時代に日本福音教会牛込教会で洗礼を受けた1932年にある。

その50年近い教師生活は大きく四期に分けることができる。すなわち、第一期は、宮城県立古川高等女学校・青森県立青森中学校（旧制、以下同じ）・滋賀県立水口中学校・大阪府立八尾中学校・私立燈影女学院高校（大阪）での英語教師ならびに陸前古川教会・青森長島教会・水口教会の日曜学校の教師であった青年教師時代（1935 - 1949年）。第二期は、シカゴ近郊にあるノースセントラル大学（North Central College）とエヴァンジェリカル・セオロジカル神学校（Evangelical Theological Seminary）での留学時代（1949 - 1952年）後の東京目白での日本聖書神学校教授時代（1952 - 1966年）。第三期は、開校準備を含めて新潟に住まい、教育人生のすべてをかけて教育実践を展開した敬和学園高校初代校長時代（1967 - 1984年）。第四期は、校長職を退任して安中に住まい後方から敬和学園を支援した名誉校長時代（1984 - 1988年）である。

太田俊雄の教育思想の源は、主に四つあると思われる。第一に、父母による家庭教育の経験であり、生徒・学生時代の教師との出会いを通じた経験であり、教師時代の生徒や教師や他の人々との出会いに基づく経験である。第二に、ブレイクやワーズワースやロングフェローなどの英詩に代表される英文学の古典、孔子や杜甫などの中国の古典、芭蕉や中江藤樹や佐藤一斎などの日本の古典である。第三に、ルソーやペスタロッチやフレーベルやデューイなどの教育思想の古典、ブッシュネルやミラーなどの宗教教育思想、小原國芳や河井道や羽仁もと子などの教育思想である。第四に、イザヤ書や箴言などの旧約聖書の教育思想、イエスやパウロなどに見られる新約聖書の教育思想、内村鑑三や新渡戸稲造などの教育思想である。

太田俊雄の教育思想の中で最も重要なキー・ワードは「宗教教育」である。これは「宗

教教育に力を入れなければ真の人格形成はできない」<sup>(2)</sup>という表現に象徴されるように、全人的な人間形成の手が加えられる「人間の教育」<sup>(3)</sup>の核心をなすものであり、またそれは「人間の尊厳」「人格教育」「人格形成」「全人教育」などの概念と密接に関連する。また「宗教教育を含まないような教育は、教育ではない」<sup>(4)</sup>という言葉に要約されるように、知識教育や偏差値教育に傾いた日本の教育に対して「真の教育」がないと批判する時に、「人間の教育」はその根拠となっている。<sup>(5)</sup>

本稿では、太田俊雄が敬和学園高校で実践し展開した宗教教育思想が、青年教師時代と留学時代の準備期間を経て日本聖書神学校教授時代に結晶化したと見て、日本聖書神学校教授時代に焦点をあてる。その時代に書かれた数少ない論文を手がかりにして、太田俊雄の「宗教教育」の概念を把握し、それが敬和学園の教育理念とどのように関連するのかを探る。

## 2. 日本聖書神学校時代とその著作<sup>(6)</sup>

太田俊雄は、1949年8月に渡米してノースセントラル大学に編入し翌年卒業し、1952年5月にエヴァンジェリカル・セオロジカル神学校で宗教教育修士課程を修了し、1952年9月に日本聖書神学校の専任教授、教務主任ならびに学生主事を兼務し着任した。<sup>(7)</sup>それは太田俊雄の母親が学んだ東京聖經女学院の恩師の岡田五作が日本聖書神学校の創立者で中心的な役割を果たした人であり、岡田五作が同じ日本福音教会出身の太田俊雄に白羽の矢を立てて、日本聖書神学校の教授職を強く要請したことによる。<sup>(8)</sup>その時、太田俊雄は実質的にはたった一人の専任教授として就任した。<sup>(9)</sup>他の教授陣は他校から出向する兼任教授と教会の主任牧師である教授で構成され、それに非常勤講師が加わっていた。太田俊雄は宗教教育担当の教授であったが、英語や新約聖書に関する科目なども教えた。

日本聖書神学校は1947年4月に金井為一郎を校長とし、岡田五作を学監とし、東京・目白の旧日本福音教会宣教師館を校舎として、予科一年、本科三年の昼間部と夜間部の二部制の牧師養成の神学校として開校し、翌年日本キリスト教団の神学校として認可された。太田俊雄が就任して、半年後の1953年4月には予科二年・本科三年、夜間部だけの神学校と学制を変更し、1954年には奨学金制度を設立し、1960年には専攻科を開設し、1966年には専攻科を研究科に変更して開講した。また、1952年には新校舎を設立して、旧校舎を男子寮に変え、1954年には図書館を新設し、1957年には礼拝堂を建設し、1958年には学校法人聖契学園を設立して翌年に東京都から認可され、1962年には男子寮を新設した。その間に専任教授を新たに2人加え、事務組織も整えていった。こうして陣容が整った1967年5月には『日本聖書神学校20年史』を刊行し、創立20周年記念式を行なった。その二ヵ月後の7月に太田俊雄は敬和学園高校の設立準備のために日本聖書神学校の教授

職を辞した。<sup>(10)</sup> 太田俊雄は文字通り日本聖書神学校の土台を築いたのであった。

教育に熱心で、以上のような校務に追われていたためか、太田俊雄が日本聖書神学校時代の14年間に書いた論文は少ない。現在、手にすることができるのは二種類である。第一に、東京神学大学の宗教教育・キリスト教教育担当の高崎毅教授との共編で『キリスト教教育講座』全4巻を新教出版社から1958年に出版したが、その中に収められた3つの論文と1つのコラムである。すなわち、第1巻『日本とキリスト教教育』で第3章「教師論」、<sup>(11)</sup> 第2巻『キリスト教教育の原理』で第5章「キリスト教教育の理論」、<sup>(12)</sup> 第4巻『キリスト教教育の過程』で第1章「キリスト教教育とコミュニケーション《序にかえて》」<sup>(13)</sup> と付録「欧米キリスト教教育史上の人物」の「ホレス・ブッシュネル」<sup>(14)</sup> である。これらの中で、巻の順序とは異なるが、「キリスト教教育の理論」が「宗教教育論」全体の総論であり、その補遺として「ホレス・ブッシュネル」があり、その各論として「教師論」と「キリスト教教育とコミュニケーション」が位置づけられる。

さらに、太田俊雄は牧師養成の神学校での教師として自らも牧師の資格を取り、1954年5月には補教師として准允を受け、1963年12月には正教師として按手礼を受けているが、第二に、正教師試験のために書いた論文「教会教育論の立場より『日本基督教団と信仰告白』を論ず」が残されている。<sup>(15)</sup> これは教会の牧師という立場で信仰告白について論じているものであるが、宗教教育学者の立場から「宗教教育論」に基づいて議論を展開している。これは『キリスト教教育講座』第2巻に収められた「キリスト教教育の理論」より5年後の1963年に書かれたものであるが、それより考えがより整理されると同時に先に進められている。以下では、このような経緯と執筆の意図と目的の違いを考慮に入れつつ、両者を補い合せてまとめて、両者の意図と目的の違いの背後に共通する太田俊雄の「宗教教育論」の概観を見ていくことにする。

### 3. 太田俊雄の「宗教教育論」：宗教教育思想の理論化

#### (1) 理論と実践の関係

太田俊雄は、宗教教育論とは何か、と言及する前に、最初に理論と実践の関係で、理論が実践の中から生まれてくることについて、次のように述べる。

「理論は実践の指針となり、またその実践の中から生まれて来るものである。実践の基礎となり、実践を推進し、そしてその実践の中で経験されるいろいろなことがらを通して、新しい理論の誕生となって発展して行くべきものである。」<sup>(16)</sup>

また、実践が理論に根ざしたものであり、さらに理論が実践を批判的に吟味することについて次のように述べる。

「われわれのキリスト教教育活動の展開は、確立された理論に根をおろし、そこから出発するのでなければならない。また、その理論に照らして、教育実践をふりかえり、これを批判し、よりよき教育実践への再出発をし、この理論に照らして、われわれがたずさわる教育実践がその方向をあやまっていな  
いかを、われわれはたえず反省する。」<sup>(17)</sup>

## (2) 「宗教教育」の概念の変遷

このように述べた後で、「宗教教育」(religious education)が、一方では、19世紀の政教分離政策により一般教育と宗教教育が分離され、公教育から後者が締め出されて教会がその責任を新たに担わされたことにより、他方では、一時的に感情的な興奮の状態に導くことによって急激な回心を迫る19世紀のリバイバル運動に対する批判の中から、自然の方法によって徐々に悔い改めと新生へと導く運動として起こったことによる、とその経緯を述べる。だが、20世紀に入って、諸宗教への寛容とキリスト教の相対化などからそれが「キリスト教教育」(Christian education)という概念に変わってきたと説明する。また、キリスト教教育とは、教育的配慮によって生徒を信仰告白や回心に導くばかりでなく、その後も引き続き信徒訓練や教育的牧会によって導き、「あらゆる時に、あらゆる年齢層を」考慮して行なわれると述べる。そして、「キリスト教教育」の中に最近では「キリスト教養育」(Christian nurture)という新しい概念が生じて展開していることを指摘する。<sup>(18)</sup>

「キリスト教養育」という概念は、19世紀半ばにアメリカの神学者・牧師・名説教育家であったホーレス・ブッシュネル(Horace Bushnell)が著した同名の著書に遡る。<sup>(19)</sup>「養育」とは家庭で親が幼な子を育む言葉であるが、太田俊雄は次のような比喩的な言葉でその概念を表現する。

「黒土を割って芽を出した若木の、周囲の雑草を取り除き、太陽光線を十分に受けることができるようにし、水や肥料のような滋養物を適度に与え、そいつと大切に見守りながら、暴風や火災の時の配慮までたえずしながら、この若木がよりよい成長をとげることができるようにして行く、というのがこのnurtureという語のもっている意味である。そのような配慮と態度でもって、悪魔の子となる危険性と神の子となる可能性とをあわせもっている子供を、神の子として受け入れられるように育てて行くのがキリスト教教育の姿である。」<sup>(20)</sup>

太田俊雄はこのような変遷を経た「宗教教育」すなわち「キリスト教教育」が行なわれる場所として、第一に、教会学校などで行なわれる教会教育、第二に、キリスト

教主義学校の礼拝や聖書科やその他の機会を通して行なわれるキリスト教教育、第三に、YMCA やYWCA などで行なわれる一般地域社会で行なわれ得るキリスト教教育を挙げる。<sup>(21)</sup>

### (3) 「生涯教育論」と「人格教育論」

以上のように述べた「宗教教育」を置き換えた「キリスト教教育」あるいは「キリスト教養育」という概念は、「生涯教育論」としての側面をもっている。ランドルフ・C. ミラーは「ゆりかごから墓場まで」を「母の胎内から墓場まで」(from womb to tomb) というキャッチ・フレーズに言い換えて、「キリスト教養育論」を展開した。<sup>(22)</sup>

太田俊雄は「キリスト教教育」とは「より円満なキリスト教的人格形成」を目的としているとする。そのためには、第一に、「神のかたち」に似せられて「神の子」として善を行なおうとするが、「罪」を犯して墮落し悪の誘惑に弱く神に背こうとする二重性をもったキリスト教的人格観、ならびに文化的・歴史的・社会的制約の中にある人間の無力感・孤独感・不安と絶望の下にあるという人間の現状認識が必要であり、第二に、人間を救う福音を説いて信仰に導く教会の性格と機能を把握する必要があり、第三に、キリスト教的人格の発達過程や学習過程を理解する必要があるが、以上の三つのバランスの上に「キリスト教教育」が行なわれると説く。<sup>(23)</sup> 特にキリスト教的人格形成に関しては、発達過程や学習過程において「人間は絶えず成長をする」「真の学習は内的経験である」「教育過程において経験を重んずる」「危機を通して成長する」という理解が重要であると指摘する。<sup>(24)</sup>

### (4) 「意図的教育」と「無意図的教育」ならびに「社会性と個人性・内面性」

「キリスト教教育」が「キリスト教養育」であり、しかもそれがキリスト教的「人格形成」にかかわる「生涯教育」である、という理解と呼応して、そのような教育にはクリークによれば「意図的教育」と「無意図的教育」があるが、それはデューイの「形式的教育」と「非形式的教育」に対応しているとする。<sup>(25)</sup> 太田俊雄は次のように述べている。

「教師は意図と計画とをもって、教育の実践にあたっているが、意図せず計画もしない所で、生徒は甚大な影響を受けて行く。教師の思想・態度・行為・言葉づかいから、細かい癖まで身につけてしまいがちなものである。教師だけでなく、一般の社会環境が強い影響力をもって、生徒の人格形成の上に作用を及ぼして行く。従って、教育実践の上で必要なことは、生徒たちが健全な、満足な成長・発達をとげて行くのに役立つような、環境の整備や交友関

係の調節というようなことも無視してはならないということである。教会の  
交わりと家庭生活を通しての教育は、こういう点で強調されなければならない  
い。」<sup>(26)</sup>

さらに、プラットによれば「円満に発達した宗教」の代表例はプロテスタントであるが、その特質として「社会性」と「個人性・内面性」のバランスが取れていることを挙げ、ある宗教の伝統・歴史・習慣・儀式など外部から「与えられ、伝達され、あるいは強制される」ものと、個人的・内面的な信仰の確立したものが「外部に向って出て行き、はたらきかけていく」ものの両面があることを指摘し、また内面性にも「学問的な神学的な裏づけ」という合理性と「合理的には説明することのできない」神秘性という両面があるとする。<sup>(27)</sup> また、「外部に向って出て行き、はたらきかけていく」ことは、バロウズによれば「宗教教育」「伝道」「社会活動」の三つでなる「キリスト者の奉仕」と似ており、「伝道」と「社会活動」という「外に向って出て行き、はたらきかけていく」すべての活動に「宗教教育」すなわち「キリスト教教育」があることを指摘する。<sup>(28)</sup>

#### (5) 「教育目標論」

このような「キリスト教教育」に影響を与える二つの教育と「キリスト教教育」が形成される中から生じる二つの側面のバランスを指摘した後で、キリスト教教育が「人格形成」の「人格教育」の「生涯教育」として向うべき根本目標について論じる。それはパウロ・ヴィースの言葉を用いれば、「キリスト教的宇宙観と人生観の確立にみちびくこと」となる。<sup>(29)</sup> すなわち、ヴィースの言葉を太田俊雄の訳で引用すると、次のようになる。

「神の聖意・目的・力などを信じる信仰にてらして、天地宇宙を考え、解釈して行くように、また同じような態度で各自の人生を考え、生存の意義と使命とを考えるように、また、人生の価値を信じ、これを最大限に発揮しようとする信仰態度に、一人一人をみちびかなければならない。自分の現実の姿を見つめ、理想を見上げて、その達成に努力させ、人間の生命は肉体の死をもって終わらない、というキリスト教の永遠の生命への確信に人々をみちびかなければならない。」<sup>(30)</sup>

太田俊雄は、ヴィースが挙げたキリスト教教育の具体的な七つの目標やランドルフ・ミラーの八つの目標を参考にして、以下の具体的な七つの目標を挙げて具体的に説明する。<sup>(31)</sup>

① 神に対する正しい関係に生徒を導き入れること。

- ②イエス・キリストを生徒に正しく理解させること。
- ③キリスト者らしい品性を徐々に生徒のうちに発達させること。
- ④よりよき社会建設の意欲をいだき、そのために努力するように導くこと。
- ⑤キリスト教的宇宙観と人生観の確立に導くこと。
- ⑥聖書その他のキリスト教文献の鑑賞。
- ⑦教会生活への積極的参加。

また、このようなキリスト教教育の目標を実現するために、必要なカリキュラムのタイプとして、①礼拝、②組織的な諸活動、③説教、④カウンセリング、⑤学習、という五つを挙げる。<sup>(32)</sup> さらに、キリスト教教育の学習内容や教授内容として、①聖書・イエス伝・教会史などの歴史的なもの、②キリスト者の生活のあり方・教会の本質や機能などの具体的な日常生活に関するもの、③キリスト教教育を基礎づける神学、という三つを挙げる。<sup>(33)</sup>

#### (6) 補論：「教師論」

キリスト教教育は社会的な活動への広がりをもつ人格形成であるが、「教育は人である。人格である」と結論づけ、<sup>(34)</sup> キリスト教教育の担い手である「教師論」を展開する。<sup>(35)</sup>

最初に、教師の備えるべき本質的特徴として、①人間形成に対する純粋な愛着と熱意、②この愛着に従って、有効な方法で教育実践をする能力、③たえず成長し、変革し、不断の発展をとげつつあるそれぞれの人間の魂と、つねに新たな面を示してくれる精神現象とに対する観察と理解（シュタイナーによる「人格性診断の能力」）、④生徒の発達に感化を与えるためのたゆみなき決意と努力、以上の4点を挙げる。最後の項目には、愛の法則に基づく社会的人間類型の特質と権力・支配の法則に従う権力的人間類型の特質が並存するが、教師では前者が圧倒的に強いが、後者については、外的強制的手段によるのではなく、生徒の自発的・自由意志による内的服従を招来するようにすることが大切であると指摘する。<sup>(36)</sup>

次に、これらに加えて、①教師自身の信仰と教えることへの召命感をもった宗教的基盤にたった人であることと、②熱心なるゆえに寛容さを欠き、過度に厳格になり偏狭にならないために、センス・オブ・ユーモアを持っていることが良い教師の条件であるとする。<sup>(37)</sup>

そして、W. C. バウアーに従って、キリスト教教育者の前提条件の資格として、①円満にして健全な人格と品性を持つこと、②人生に対する真剣な宗教的態度を有することを挙げ、教師の人格的資格として、①自主性、②機知に富んでいること、③力強

さ、④落ち着き、⑤ゆとり、⑥状況に対する鋭い洞察とその克服、⑦人間に対する深い関心、⑧同情心と理解、⑨他人の意見を受け入れる包容力を挙げ、最後に第三の資格として、教師として特別な訓練を受けることを挙げている。<sup>(38)</sup>

そして、このような教師論が敬和学園高校で具体的に実践されていくのであった。<sup>(39)</sup>

#### (7) 補論：「コミュニケーション論」

キリスト教教育の方法論で重要なのは、それを伝達するコミュニケーション論である。<sup>(40)</sup> 太田俊雄は、最初に一般的な「コミュニケーション」について、(1)思考とコミュニケーション、(2)対人コミュニケーション、(3)集団コミュニケーション、(4)人と物とのコミュニケーションについて述べ、次に「コミュニケーションの発達と教育」について、(1)コミュニケーションの発達、(2)コミュニケーションの基本的原則に述べた後で、①感覚のコミュニケーション、②感情のコミュニケーション、③知性のコミュニケーション、という三段階を経て行なわれることについて説明する。そして、これらの一般論を踏まえて、最後に「キリスト教教育の問題」でキリスト教教育の当面している問題として、ヘンドリック・クレマーが「コミュニケーションの崩壊」と称し、ディリストーンが「深淵（ガルフ）」と表現する、コミュニケーションが成り立たないコミュニケーション・ギャップの問題について取り上げる。<sup>(41)</sup>

すなわち、キリスト教教育においてコミュニケーションが成り立たない主な原因として、第一に、特殊社会で特殊用語を使うことによる一般大衆との「共通語」の欠如、時代錯誤のコミュニケーションを行なうことによる「共通語」の欠如という問題を指摘する。第二に、発信人と受信人の対人関係である「相互的信頼」の欠如という問題があることを指摘する。また、世俗化、唯物的思考、享樂的人生観の浸透によってギャップが益々大きくなっていくことを指摘する。また、コミュニケーションの過程の間に、雑音や妨害が入ることがあるが、それを克服すべきこと。さらに、コミュニケーション・ギャップを埋めるために、お互いにわかる「共通の」言葉は何であるか、相互信頼はいかに打ち立てられるのか、神話的表現と科学的・合理的思考とのギャップをどのように橋渡しできるのか、などを考えて「魂と魂とがたがいにかたがたにこだまし」合う道を探らなければならないと述べる。<sup>(42)</sup>

しかし、キリスト教教育は、「本質的に人間のコミュニケーションの領域をこえているもの」であり、人間ではどうすることもできないことをわきまえ、言葉を越えて「おのずから輝き出てくるものによって相手が名状しがたいばかりの影響を受ける」コミュニケーションであることを指摘する。そして、「教育はコミュニケーションであり、キリスト教教育はキリスト教コミュニケーションである」と結論する。<sup>(43)</sup> また、



ここから「教育は人間関係である」「教育は交わりである」という考えも生まれてくる。<sup>(44)</sup>

#### 4. 敬和学園高校の教育理念：宗教教育思想の実践化

太田俊雄は日本聖書神学校時代に書いた諸論文で結晶化させた宗教教育の理論を敬和学園高校初代校長時代にどのように実践していったのであろうか。ここでは結びに変えて、以上でその概略を見てきた太田俊雄の「宗教教育」（「キリスト教育」）の理論と敬和学園高校の教育理念の背景との関係を示唆することにする。

太田俊雄は敬和学園高校を開設する時に、主に二つのことを念頭に置いていたと思われることが、設立募金趣意書・1968年度入学案内・開校直前直後の『敬和』『太夫浜卓話』などに謳われている教育理念から明らかになる。すなわち、一つはキリスト教主義に基づく人間教育であり、もう一つは国際人としての日本人の教育である。

第一に、キリスト教主義に基づく「人間教育」は、「人格教育」「人格形成」「全人教育」とも称して、教育不在の教育界に対してこれらによって「真の教育」を行なっていくことを宣言する。<sup>(45)</sup> また、人間をつくる教育では「個人の尊厳」「個人の価値」に目覚めさせる「個性の尊重」が大切で、そのためには畏敬の念を持つことが必要で、「宗教教育」が不可欠であり、<sup>(46)</sup> また生徒の学びには「自主性」と「自己形成」が必要であると説く。<sup>(47)</sup> さらに、「人格教育」「人格形成」「全人教育」には、「無意図的教育」が重要な役割を果たし、そのためには共に生活する「寮教育」や労働による「労作教育」が行なわれる必要があることを説くのである。<sup>(48)</sup> こうして「人格の完成」（教育基本法第一条）を目標とした「生涯教育」の基礎を築いていくのである。

第二に、国際人としての日本人としての教育に関しては、「国際的視野に立つ教育」をスローガンとして掲げ、<sup>(49)</sup> 世界を教室とするが、<sup>(50)</sup> それは「人間の形成過程における交流」すなわち「国際的な人格形成」を目指しているものであった。<sup>(51)</sup> こうして、人格の「個人性・内面性」ばかりでなく世界的視野での「社会性」を築いていくのである。

太田俊雄は、このような宗教教育思想に裏付けられた自らの教育実践を「真の教育」<sup>(52)</sup> あるいは「人間の教育」<sup>(53)</sup> と称して、当時の（そして現代の）偏差値教育に集約され「真の教育」も「真の教育者」も不在の日本の教育を<sup>(54)</sup> 時には「狂育」<sup>(55)</sup> と呼んで、それに対して果敢に挑戦していった。すなわち、「人格不在の教育」<sup>(56)</sup> に対して「人格教育」<sup>(57)</sup> 「人格形成」<sup>(58)</sup> を唱え、「知育偏重」「学校教育偏重」<sup>(59)</sup> に対して「全人教育」<sup>(60)</sup> 「生涯教育」<sup>(61)</sup> 「自己教育」<sup>(62)</sup> を唱えた。そして、太田俊雄の教育思想は、教育改革に取り組む稲葉文部大臣に宛てた手紙や中曽根首相への望み<sup>(63)</sup> という形式を取るにまで高まっていった。

以上見てきたように、敬和学園の教育理念の背景の一つに、ホーレス・ブッシュネルの

「キリスト教養育」、それを展開したランドルフ・C. ミラーの「生涯教育」「人格教育」「人格形成」、クリークの「意図的教育」「無意図的教育」、プラットの「社会性」と「個人性・内面性」のバランスなどに遡る、太田俊雄の宗教教育思想があることを明らかにした。特に重要なのはホワイトヘッドのプロセス神学をデューイのプロセス教育学と統合しようとし、関係性と経験を重んじたランドルフ・ミラーの宗教教育思想である。<sup>(64)</sup>

## 註

- (1) 太田俊雄の年譜に関しては、太田敬雄編『父との「新しき出会い」：太田俊雄召天十周年記念』『太田俊雄年表』、開文社出版、1999年、ix-xiv頁；鈴木孝二「初代校長 太田俊雄の道すじーその1」『敬和学園 その歩みー創立20周年記念ー』敬和学園高校、1987年、xxx-xxx頁、同「初代校長 太田俊雄の道すじーその2」『敬和学園 その歩みー創立30周年記念ー』敬和学園高校、1998年、226-252頁、同「初代校長 太田俊雄の道すじーその3」『敬和学園 その歩みー創立40周年記念ー』敬和学園高校、2007年、164-192頁、参照。
- (2) 『敬和』第8号、1968年4月、『太夫浜卓話 (1/3)』2008年、敬和学園高校、36頁。
- (3) 『敬和』第10号、1968年、『太夫浜卓話 (1/3)』、42頁。
- (4) 『敬和』第51号、1972年3月、『太夫浜卓話 (1/3)』、207頁。
- (5) 『敬和』第38号、1971年1月、『太夫浜卓話 (1/3)』、157頁；『敬和』第121号、1979年5月、『太夫浜卓話 (2/3)』、239-240頁。
- (6) 『敬和』第99号、1976年12月、『太夫浜卓話 (2/3)』、145頁。
- (7) 日本聖書神学校創立30周年記念出版委員会『日本聖書神学校三十年』『日本聖書神学校年表』、新教出版社、1976年、195-224頁、特に太田俊雄の在任期間に関して、202-212頁、参照。
- (8) 太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、77頁。
- (9) 『敬和』第99号、1976年12月、『太夫浜卓話 (2/3)』、145頁。
- (10) 『敬和』第1号、1967年9月、『太夫浜卓話 (1/3)』、6頁；『敬和』第30号、1970年4月、『太夫浜卓話 (1/3)』、123頁；『敬和』第157号、1982年6月、『太夫浜卓話 (3/3)』、106頁、参照。
- (11) 『キリスト教教育講座』第1巻、新教出版社、1958年、163-181頁。
- (12) 『キリスト教教育講座』第2巻、219-247頁。
- (13) 『キリスト教教育講座』第4巻、3-22頁。
- (14) 『キリスト教教育講座』第4巻、223-228頁。
- (15) 太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、81-96頁。
- (16) 『キリスト教教育講座』第2巻、220頁。
- (17) 同上。
- (18) 『キリスト教教育講座』第2巻、221-225頁；太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、81頁下段-82頁上段。
- (19) Horace Bushnell, *Christian Nurture*, New Haven: Yale University Press, 1950 (reprinted, original 1847). ブッシュネルについては、『キリスト教教育講座』第4巻、223-228頁；森田美千代「ホーレス・ブッシュネルの *Christian Nurture* の成立過程」『キリスト教教育論集』(キリスト教教育学会)、第9号(2001)、25-42頁；篠原明「ホーレス・ブッシュネルの家庭教育論における母性と父性の比較研究」『キリスト教教育論集』第10号(2002年)、1-16頁、参照。
- (20) 『キリスト教教育講座』第2巻、223頁。最後の一行に関する文章は、ブッシュネルの名前と共に『敬和』でしばしば引用される、『敬和』第47号、1971年11月、『太夫浜卓話 (1/3)』、

- 188頁；『敬和』第58号、1972年11月、『太夫浜卓話（1/3）』、233頁；『敬和』第168号、1983年6月、『太夫浜卓話（3/3）』、146頁。
- (21) 『キリスト教教育講座』第2巻、224-225頁。
- (22) Randolph C. Miller, *Christian Nurture and the Church*, New York: Charles Scribner's Sons, 1961, 太田俊雄・中沢三千子共訳、R. C. ミラー著『教会とキリスト教養育』、1966年。太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、82頁。『敬和』でも、ミラーの名前と共に、ミラーのキャッチ・フレーズが引用されている、『敬和』第59号、1972年12月、『太夫浜卓話（1/3）』、237、238頁、『敬和』第202号、1986年7月、『安中だより・小文集』敬和学園高校、2008年、55頁。
- (23) 『キリスト教教育講座』第2巻、225-234頁。
- (24) 『キリスト教教育講座』第2巻、232-234頁。
- (25) E. Kriek, *Philosophie der Erziehung*, 1925, “Absichtliche Erziehung” & “Absichtlose Erziehung” ; John Dewey, *Democracy and Education*, 1932, “formal education” & “informal education.” 太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、82頁下段、83頁下段。
- (26) 『キリスト教教育講座』第2巻、234頁。無意図的教育が意図的教育よりも人格形成にとって大きいことは、『敬和』第70号、1974年1月、『太夫浜卓話（2/3）』、34、35頁、参照。
- (27) J. B. Pratt, *The Religious Consciousness*, New York: Macmillan Co., 1920, ch.1. 太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、85頁-86頁上段。
- (28) M. Burrows, *An Outline of Biblical Theology*, Philadelphia: Westminster Press, 1946, ch.14. 太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、86頁。
- (29) P. H. Vieth, *The Objective in Religious Education*, Red Rabel Reprints, 1930.
- (30) 太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、90頁上段。
- (31) 太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、237-244頁。
- (32) 『キリスト教教育講座』第2巻、244-245頁。
- (33) 『キリスト教教育講座』第2巻、245頁；太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、91頁下段-92頁上段。
- (34) 『キリスト教教育講座』第1巻、175頁；太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、93頁上段。
- (35) 『キリスト教教育講座』第1巻、163-181頁。
- (36) 『キリスト教教育講座』第1巻、163-167頁。
- (37) 『キリスト教教育講座』第1巻、167-171頁。
- (38) W. C. Bower, *Religious Education in the Modern Church*, The Bethany Press, 1929. 『キリスト教教育講座』第1巻、171-174頁。
- (39) 『敬和』第2号、1967年10月『太夫浜卓話（1/3）』、12-13頁；『敬和』第8号、1968年4月『太夫浜卓話（1/3）』、34-36頁；『敬和』第10号、1968年6月『太夫浜卓話（1/3）』、42-45頁；『敬和』第28号、1970年2月『太夫浜卓話（1/3）』、114-117頁；『敬和』第37号、1970年12月『太夫浜卓話（1/3）』、150-153頁；『敬和』第75号、1974年7月『太夫浜卓話（2/3）』、53-56頁；『敬和』第76号、1974年8月『太夫浜卓話（2/3）』、57-60頁；『敬和』第95号、1977年7月『太夫浜卓話（2/3）』、129-132頁；『敬和』第96号、1977年9月『太夫浜卓話（2/3）』、133-136頁；『敬和』第108号、1978年2月『太夫浜卓話（2/3）』、180-184頁；『敬和』第177号、1984年4月『太夫浜卓話（3/3）』、173-178頁、他。
- (40) 『キリスト教教育講座』第4巻、3-22頁；太田敬雄編『父との「新しき出会い」』、93頁下段。
- (41) Hendrick Kraemer, *The Communication of the Christian Faith*, Philadelphia: Westminster Press, 1956; F. D. Dillistone, *Christianity and the Communication*, New York, Charles Scribner's Sons, 1956. 『キリスト教教育講座』第4巻、14-21頁。
- (42) 『キリスト教教育講座』第4巻、14-20頁。『敬和』第6号、1968年2月『太夫浜卓話（1/3）』、16頁；『敬和』第11号、1968年7月『太夫浜卓話（1/3）』、48頁；『敬和』第23号、1969

- 年8月『太夫浜卓話 (1/3)』、96頁、参照。
- (43) 『キリスト教教育講座』第4巻、20-21頁。
- (44) 『敬和』第145号、1981年5月『太夫浜卓話 (3/3)』、56-59頁；『敬和』第157号、1982年6月『太夫浜卓話 (3/3)』、104-107頁、他。
- (45) 『敬和』第2号、1967年10月『太夫浜卓話 (1/3)』、10-13頁。
- (46) 『敬和』第8号、1968年4月、『太夫浜卓話 (1/3)』、34-37頁。
- (47) 『敬和』第9号、1968年5月、『太夫浜卓話 (1/3)』、38-41頁（自主性）、『敬和』第15号、1968年12月、『太夫浜卓話 (1/3)』、62-65頁（自己形成）。
- (48) 『敬和』第2号、1967年10月『太夫浜卓話 (1/3)』、12 - 13頁（寮教育）；『敬和』第6号、1968年2月『太夫浜卓話 (1/3)』、26-28頁（寮教育）；『敬和』第32号、1970年6月『太夫浜卓話 (1/3)』、130-133頁（寮教育）；『敬和』第12号、1968年9月、『太夫浜卓話 (1/3)』、50-53頁（労作教育）、他。
- (49) 『敬和』第4号、1967年12月『太夫浜卓話 (1/3)』、18 - 21頁；『敬和』第5号、1968年1月『太夫浜卓話 (1/3)』、22 - 25頁。
- (50) 『敬和』第17号、1969年2月『太夫浜卓話 (1/3)』、70-73頁；『敬和』第20号、1969年5月『太夫浜卓話 (1/3)』、82 - 85頁。
- (51) 『敬和』第60号、1973年1月『太夫浜卓話 (1/3)』、240-243頁。
- (52) 『敬和』第1号、1967年1月、『太夫浜卓話 (1/3)』、9頁；『敬和』第2号、1967年10月、『太夫浜卓話 (1/3)』、10、13頁；『敬和』第39号、1971年2月、『太夫浜卓話 (1/3)』、158、159、160頁；『敬和』第53号、1972年5月、『太夫浜卓話 (1/3)』、212頁、他多数。
- (53) 『敬和』第8号、1968年4月、『太夫浜卓話 (1/3)』、34頁；『敬和』第14号、1968年11月、『太夫浜卓話 (1/3)』、53頁；『敬和』第64号、1973年6月、『太夫浜卓話 (2/3)』、7頁；『敬和』第163号、1983年1月、『太夫浜卓話 (3/3)』、120頁。
- (54) 『敬和』第28号、1971年1月、『太夫浜卓話 (1/3)』、154-157頁；『敬和』第39号、1971年2月、『太夫浜卓話 (1/3)』、158-161頁；『敬和』第66号、1973年8月、『太夫浜卓話 (2/3)』、17-20頁。
- (55) 『敬和』第66号、1973年8月、『太夫浜卓話 (2/3)』、19頁；『敬和』第70号、1974年1月、『太夫浜卓話 (2/3)』、32頁；『敬和』第91号、1976年3月、『太夫浜卓話 (2/3)』、119頁；『敬和』第120号、1979年4月、『太夫浜卓話 (2/3)』、234、236頁；『敬和』第141号、1981年1月、『太夫浜卓話 (3/3)』、40頁。
- (56) 『敬和』第7号、1968年3月、『太夫浜卓話 (1/3)』、30-33頁。
- (57) 『敬和』第2号、1967年10月、『太夫浜卓話 (1/3)』、12-13頁；『敬和』第14号、1968年11月、『太夫浜卓話 (1/3)』、58-61頁、他。
- (58) 『敬和』第2号、1967年10月『太夫浜卓話 (1/3)』、10-13頁（寮教育）；『敬和』第12号、1968年9月、『太夫浜卓話 (1/3)』、50-53頁（労作教育）、他。
- (59) 『敬和』第59号、1972年12月、『太夫浜卓話 (1/3)』、237頁。
- (60) 『敬和』第51号、1972年3月、『太夫浜卓話 (1/3)』、205頁；『敬和』第97号、1976年10月、『太夫浜卓話 (2/3)』、137頁。
- (61) 『敬和』第59号、1972年12月、『太夫浜卓話 (1/3)』、236 - 239頁、他。
- (62) 『敬和』第132号、1980年4月、『太夫浜卓話 (3/3)』、6 - 9頁；『敬和』第160号、1982年10月、『太夫浜卓話 (3/3)』、115頁。
- (63) 『敬和』第59号、1972年12月、『太夫浜卓話 (1/3)』、236-239頁；『敬和』第60号、1973年1月、『太夫浜卓話 (1/3)』、240 - 234頁、『敬和』第176号、1984年3月、『太夫浜卓話 (3/3)』、171 - 174頁。
- (64) 今回は、小原國芳、羽仁もと子、河井道と太田俊雄の宗教教育思想の關係を探る予定である。